

(5) 大用小学校

学 校 長 池上 みどり
校内研究代表者 山脇 昌代

1. 研究主題 「確かな学力を身につけ、ともに学び合う子の育成」

2. 主題設定の理由

本校の児童は、豊かな自然と温かい地域の人達に見守られ、明るくのびのびと生活している。少人数の集団の中で真面目に取り組むことができ、友だちにも優しい。しかし、少人数がゆえに、短い会話で意思疎通がすんでしまい、自分の意見や考えをしっかりと言葉にしてみんなの前で発表したり、説明したりすることに課題のある児童が多い。また、他校との交流会ではなかなか自分を表現できないなど、自己表現力やコミュニケーション能力に課題がみられる児童もいる。

平成 27 年度からは、国語科の授業のスタンダードづくりに取り組んできた。授業を充実させるために、友だちの意見や考えに対して自分の考えを発表する場面を多くし、コミュニケーション能力を高めてきた。しかし、算数科において学力テスト等で平均点を下回り、課題があることが分かってきた。これまでの課題に加えて算数科の課題を克服できるよう、29 年度より算数科を中心とした授業研究に取り組んでいる。昨年度は算数科の授業スタンダードをつくり、構造的な板書、児童の学びや考えが見えるノート指導に取り組んできた。その結果、全国学力学習状況調査等において、国語、算数ともに平均を上まわる結果となった。しかしながら、各種学力調査の結果から、算数用語の理解や活用、説明する力、数学的な考え方において各学年共通の課題が見えてきている。

このような実態から今年度も「一人学び」や「とも学び」を授業のなかに積極的に取り入れ、言語活動を活発に行う授業の研究に引き続き取り組む。日々の授業の中で数直線に表したり、算数用語を使って説明する活動を取り入れ、数学的な考え方、説明する力を伸ばしていきたい。能力ベースのめあての設定、つけたい力を明確にした授業研究や指導方法の工夫改善に努め、学年に応じた確かな学力の向上をめざしたい。また、帯タイムを活用し、放課後加力学習と連動させながら弱点の克服にも取り組んでいきたい。

思考力、判断力、伝える力の育成に役立てるよう教科学習と関連づけて研究を進めてきた NIE の活用は、今年度もふるさと教育と関連づけながら、地域に目を向けた学習につなげていき、また、体験活動の良さを生かして学校の教育活動を地域に情報発信していける活動としていきたい。

研究仮説

- ・ひとり学びやとも学びを授業の中に取り入れ、言語活動を活発に行う授業を展開することで、表現力やコミュニケーション能力が高まるであろう。
- ・指導法の工夫改善を行い、子どもの思考過程や言語活動を明確にした授業づくりを行えば、主体的に学び豊かに表現できる子どもが育つであろう。
- ・丁寧な学習指導を行うことで、基礎基本を確実に身につけることができる。基礎基本が身に付けば、問題が解けるようになり、算数科の苦手意識がなくなり、本校の課題解決につなげることができるであろう。

3. 研究の進め方と方法

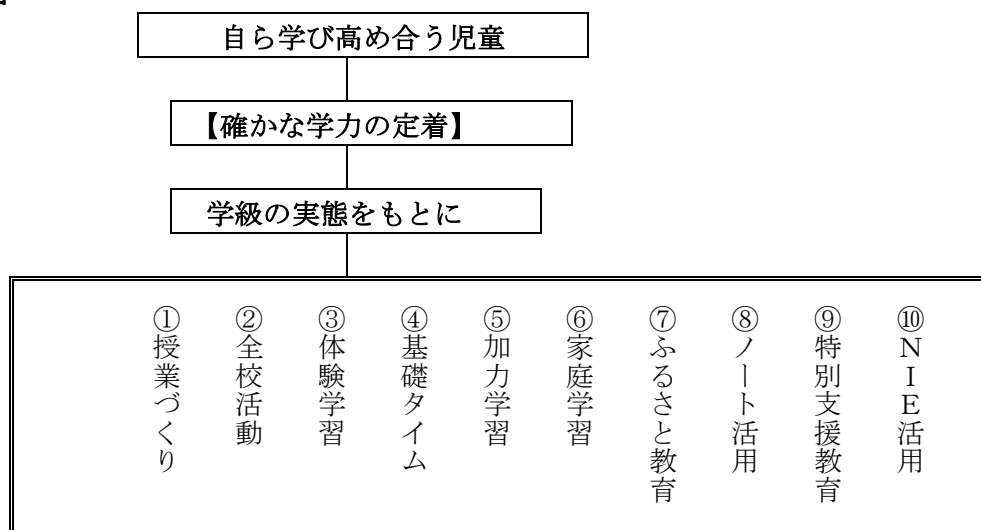
- ①毎月、原則として水曜日を校内研究日として計画的に研究を進める。
ただし、研究推進に必要な場合は、臨時に研究日を設定する。

- ②研究日の司会と記録については、職員会の司会と記録同様に輪番制で担当する。
- ③研究の推進や検証に必要な研究授業を計画的に実施する。
学習指導案を作成し、全教員で教材研究を行い研究授業に臨む。
- ④研究授業は水曜日に行い、全教員が参観し、反省会をその後行う。
- ⑤基礎学力の定着と学力の向上をめざす。
- ⑥学期に1回程度、各学級の実践を出し合う場を設け、学級の実態や教育実践について共通理解をする。児童の情報交換を行う。
- ⑦指導力を向上させるために、外部講師を招聘して研究の質を高める。
- ⑧四万十市複式教育研究会の活動に参加し、教育的力量を高める。

※校内研究推進にあたって共通理解しておくべきこと

- ①子どもの実態に基づいた教育実践を進める。
- ②へき地・小規模校の特性が生かせる特色ある教育活動の創造に取り組む。
- ③教育実践を互いに見つめ合い、検証し合いながら共に教師として高め合う研究をする。
- ④前年度までの実践を継承すると共により良い実践となるよう改善しながら研究を進める。

4. 研究内容



① 授業づくり

- ・研究授業（算数科）を全学級が行い、主体的な児童の活動、教師の発問や評価の与え方を研究する。
- ・言語活動を充実する（ペア学習、ふり返り、授業後の感想）
- ・資質、能力ベースの「めあて」の提示
- ・大用小スタンダードをつかった授業の流れやノート指導
- ・複式授業等の研究
- ・毎月板書を掲示し交流する。

② 全校活動

作文・新聞朝会、クロッキー朝会を通し、意見や感想などを出させる。

③ 体験活動

縦割り班を活用し、リーダーを育て仲間づくりをしていく。地域の行事（片魚、常六との地域交流・まつり等）では児童主導で活動し、交流をする。

④ 基礎タイム

算数科の基礎力向上をめざし、10分間学習を継続して行う。

⑤加力学習

放課後30分程度、全教職員で取り組む。

⑥家庭学習

「家庭学習の手引き」をもとに基礎学力の定着や音読練習、授業へ向けての学習を習慣化させる。

⑦ふるさと教育

これまでの行事を基本にしながらふるさとの良さを発見する取組を行う。

講師を招聘し、地域について学習する。

⑧ノート活用

「ノートの書き方7つのきまり」をもとにノート指導を行う。教室にきまりを掲示する。

定期的にノートを掲示し、取組を共有し合う。各学年1名ずつのノートを掲示する。

⑨特別支援教育

全学級と教職員に児童理解学習と交流学习を行う。給食、生活科、学校行事等での交流。

⑩NIE活用

新聞に興味を持ち、新聞に親しむ習慣をつける。

ワークホールに新聞コーナーを設ける。(高知新聞)

新聞朝会を行う。はがき新聞、学校新聞、学級新聞づくりを行う。

読み取った資料をもとに、自分の見方、考え方を広げたり、深めたりする。

授業の中で活用する。高知新聞へ投稿する。

新聞から表現方法を学び、学習のまとめとして新聞づくりを取り入れる。

5. 今年度の成果と課題 【成果(○) 課題(●)】

○今年度は、指導主事を3回招聘した授業研究と特別支援学級はサポート事業を活用、1年は小中合同授業研で授業公開ができてよかった。

○西部教育事務所の指導主事に3回来校していただき、それぞれ違った講話をしてくれたことが勉強になった。

○資質、能力ベースのめあてを意識した授業の構成を心掛けた。

○算数用語を意識して説明したり、振り返りをしたり、まとめたりすることができた。

○中学校との授業交流で、授業や指導の様子が分かり良かった。

○校内研の計画が滞りなく、計画性を持って進められ、抜かりなく行うことができた。

○ノートの掲示、板書交流を定期的に行うことができた。特にノートの掲示は、全員の児童を掲示することを意識してできた。

○研修費で、新しいプリント集等を購入でき、授業や基礎タイム、加力等に活用できた。

○基礎タイムや家庭学習での繰り返しの学習で、基礎学力をつけてきた。加力学習では、全職員に関わってもらっての学習ができた。

○毎週、水曜日は、国語(ことばのきまり等)を行うことで、国語の力もついてきた。

○総合学習の一つとしてふるさと教育に取り組んだことを、様々な方法で児童、中学校生徒、地域にも伝えることができた。

○図書委員会の取組のおかげで、読書をする児童が増えた。

●みつけ学習で予習して次時に生かすというのは難しかった。

●複式学級が一つだけなので、複式授業の研究をもう少し出来たらよかったのではないかと。

●全校活動(作文、新聞朝会)で意見がたくさん言えるようになってきたので、意見が重ならないよう、発表の仕方を工夫していく。

●低学年の新聞づくりでは、継続的にやってはいるが難しかった。

●家庭学習の定着が身につかない児童への手立てが必要である。

●朝読書はできているが、目標冊数に到達していない児童が数人いる。

●地域との交流会の設け方を考える。